

# 特集にあたって

山下 信雄 (京都大学)

本号では、先月号に引き続きデータサイエンス教育を特集しています。先月号と同様に、まずデータサイエンスについて概観したあとに、いくつかの大学におけるデータサイエンス教育の取り組みを紹介しています。さらに、先月号とは別の観点として、企業におけるデータサイエンスの取り組みとコンペティションの教育効果についての解説を掲載しています。それらの具体的な内容について以下のとおりです。

まず、横浜市立大学の山上雅夫氏に日本におけるデータサイエンスの歴史と今後について、ORの視点も交えて解説していただいています。次に、和田耕一氏ら(筑波大学)、加藤直樹氏ら(兵庫県立大学)、矢部博氏(東京理科大学)には、各大学のリーダーとして、ご所属の大学におけるデータサイエンス教育を紹介していただいています。筑波大学では全学展開している教養科目の設立経緯とその内容、兵庫県立大学では新学部の設立とそのカリキュラム、そして東京理科大学では研究とリカレント教育を中心に扱っています。各大学の特徴が表れたアプローチをみることができ、大変参考になるものと思います。近年のデータサイエンス教育への渴望は日々のデータが生成されている企業の現場から出されています。そこでヤマトホールディングス株式会社の中林紀彦氏には企業経営に必要なデータサイエンスについてまとめていただきました。最後に、「データ解析コンペティション」を主宰されている中央大学の生田目崇氏から、その教育的効果について解説していただきました。データ解析コンペティションは、OR学会と関連深く、また、研究室レベルですぐに実践できるデータサイエンス教育であることがわかります。

ところで、本稿を執筆している私は、先月号のオーガナイザの椿広計先生(統計数理研究所)とは違い、データサイエンス教育に関してはまったくの素人です。そのような私が本特集号と関係している理由は、2020年度春季OR学会シンポジウム「データサイエンス教育の潮流」の実行委員長であったからです(残念ながら

コロナ禍で中止になってしまいましたが)。それでは、なぜ、素人の私ができるようなシンポジウムを企画したかということ、以下に書きますように、OR学会ならびにOR学会員にとって、データサイエンス教育は切っても切れないものと考えたからです。

皆様の中には、新聞などで「最適なスケジューリングを与えるAI(ORでない!)を開発」などという見出しをみて、忸怩たる思いをされた方もおられるのではないのでしょうか。私の所属する情報学科で新入生90名にとったアンケートでは、データサイエンスを学びたいという学生が多くいる一方、ORを知っているという学生はいませんでした。先月号、本号を読んでいただくとわかるとおり、ORはデータサイエンスの基礎理論の一つであると同時に、データサイエンスと社会をつなぐ実践技術でもあります。さらに多くのOR学会員が新設の学部やセンターの設立に深く関わっています。そこで(AIでない!)ORの重要性を社会に認知してほしい、シンポジウムを企画しました。

一方、OR学会員の皆様にもデータサイエンス教育の様子を知ることは大きなメリットがあるように思います。遅かれ早かれ、どこかの大学でもデータサイエンス教育に関連した学部、学科、科目の設置が行われるでしょう。その際に、OR学会員である教員に白羽の矢(?)があたる可能性は高いと思います。そのときに本特集が役立つことを期待しています。また、若手の教員、学生にとっては、データサイエンスやその教育法を知っているということは今後のキャリアパスに大いに役立つと思います(「ORを知っている」ことが武器になるとおよいのですが)。

今月号は上記のシンポジウムと関係はしておりますが、実際のところは前号と合わせた新企画です。今月号の企画の大半は生田目崇先生のご尽力によるものです。また、本稿執筆にあたり編集委員の野々部宏司先生にお世話になりました。最後に、データサイエンス教育とともにORの教育も社会的に隆盛していくことを願っております。